

静岡

2017年4月19日

浜松市中区の男性が屋台手作り 23日お披露目

浜松まつりの開幕まで二週間に迫る中、浜松市内の倉庫で、最近では珍しい手作りの「子ども屋台」が完成の日を待ちわびている。丹精するのは、自前の屋台を持たない中区北田町出身で「子どもが主役のまつりを」と願い続ける男性。二十三日、地元の子どもらにお披露目する。

雨脚が強まってきた十七日夕方。会社の倉庫内に、ヒノキの香りが漂っていた。車輪四つの上には、装飾された高さ約二・三メートルの木組み。脚立に乗った管楽器販売「バルドン楽器」社長、塚本好司（よしじ）さん（74）＝同区曳馬＝が、屋根に銅板をふきながら目を細めた。「立派な屋台になったな」

子どものころ、毎年まつりに参加していた塚本さん。他の町が自分たちの屋台を引いているのが、ずっとうらやましかった。

音楽を志して大阪音楽大に進み、大阪フィルハーモニー交響楽団などを経て、一九七五年に地元で会社を興した。手を動かすのが好きで、指揮棒を振った浜松市民吹奏楽団では、自前の小道具もこしらえた。定期演奏会ではスペインの曲に合わせて数メートル四方の白布を天井からつるし、サグラダファミリア風に仕立てた。

社長業に余裕ができてきた昨年夏、小学校時代の同級生で北田町自治会長の梶弘さん（74）から、子ども会の現状を聞き、自分のころの半分の十人ほどに減っていることを知った。塚本さんは「こどもの日の祭りだから、もっと子どもが誇りを持てるようにしたい」と自作屋台の寄贈を提案。梶さんは「こんなありがたい話はない」と喜んだ。

近くに住む元大工の奥山金一さん（68）の手を借り、今年一月下旬から作業を始めた。屋台は買えば数千万円するが、材料費を百四十万円ほどに抑えた。一方、基礎となるヒノキは節のない高品質材を使い、屋台の足の銅板には、町名を彫るこだわりよう。奥山さんも「外に出しても恥ずかしくない」と満足げだ。

屋台は二十二日までに完成させ、二十三日、町民に披露し、自治会へ寄贈する。まつり本番では町内で引き回される予定で、塚本さんは「一心不乱に造ってきた。綱を引いて喜ぶ、子どもたちの笑顔が見られれば、それで十分」と話した。

（鈴木凜平）



完成に向けて、屋台を仕上げる塚本好司さん（左）と奥山金一さん＝浜松市中区曳馬のバルドン楽器倉庫で